

タイトル	非同期型オンライン講義の取り組みと学生の受講スタイル
著者	丸島, 歩; MARUSHIMA, Ayumi
引用	北海学園大学人文論集(72): 97-137
発行日	2022-03-31

非同期型オンライン講義の取り組みと 学生の受講スタイル

丸 島 歩

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染防止対策のため、2020年度より大学を含む多くの教育機関でオンライン授業の実施が迫られ、zoom等のオンライン会議システムを利用した授業や、LMS（Learning Management System）を活用しての授業実践が行われてきた。

日本語学習者への日本語教育を提供する教育機関においても、オンライン・ツールを活用したさまざまな授業実践が行われ、またそれが国や地域、教育機関の別を越えて、オンラインのワークショップや交流会を通して共有されてきた¹。

筆者は2020年度に現在の勤務校に着任して日本語教育関連の科目を担当するようになり、どのように効果的なオンライン授業を行うか、また将来の日本語教育を担う可能性のある学生たちに、日本語教育現場の大きな変化を踏まえてどのような学びが提供できるか、試行錯誤を行ってきた。

¹ 定期的で開催されているものとして、香港・台湾等の日本語教師で運営されている「zoomで実践シェア会」、国際交流基金上級専門家である村上吉文氏が運営する「zoomでハナキン」、国際交流基金ブダペスト日本文化センター日本語教育アドバイザーの林敏夫氏が運営する「オンラインでこんな授業をしてみたい勉強会」などが挙げられる。それ以外にも、これまで対面で実施されてきた日本語教育関連の学会や研究会等がオンラインで実施されるようになったことで、オンラインでの授業実践がさらに意識される状況になっていると言える。

筆者が担当する「日本語教授法Ⅰ」は日本語教員養成課程の必修科目であるが、新型コロナウイルスの感染状況や受講者数などの関係から、2020年度に引き続き2021年度も非同期型（オンデマンド型）のオンライン授業として実施した。オンデマンド型の授業は時間が制約されない、繰り返し授業を視聴できるなどの利点がある一方、リアルタイムでないために緊張感が保てない、教員—受講生間、または受講生間の人間関係が構築しにくいなどの欠点も考えられる。教員側は大学として全学的に行われている授業評価アンケートや、毎回の課題で受講生の状況のある程度把握することはできるものの、どのように学修を進めているのか、そこから十分に知ることは難しい。また、オンライン授業の際に受講生がどのように学んでいるのかを調査した研究も、充分に行われているとは言えない。

本論はオンライン授業に関する先行研究を整理したうえで、2021年度に開講された「日本語教授法Ⅰ」の授業実践についてまとめたのち、第15回（最終回）で実施したオンライン授業の受講方法などについて受講生を対象に尋ねた「ミニ・レポート」の回答や記述を分析する。そこから本科目の実践において効果的であったと思われる点と改善点を整理し、今後のより良い授業運営の一助とすることを目的とする。

2. 先行研究

2-1. 大学等におけるオンライン授業

前述のとおり、2020年度から多くの大学等でオンライン授業が実施されてきた。2020年度の早い時期における実践報告としては柿崎（2020）が挙げられる。柿崎（2020）では名古屋市立大学医学部における、学期開始以前の学生や教員への対応とZoomを用いた講義の事例、学生・教員のオンライン授業への反応についてまとめている。

オンライン講義の取り組みの例としては医療・生理学系の学部での実践報告が多いが、文系科目としては藤井（2021）、小曾川（2021）などが挙げられる。藤井（2021）は高等専門学校において筆者が担当した授業につい

て、オンラインでどのように授業を実施したのかについて簡潔にまとめられている。講義部分については教室にビデオカメラを設置して板書をしつつ解説する講義を撮影することで動画を作成したオンデマンド型の授業を行い、ディスカッションやプレゼンテーションなどを行う場合などはオンタイム型（リアルタイム型）の授業を Google Meet を用いて行っていた。オンライン授業の利点として、ディスカッションの際にチャット機能が利用できることで対面講義よりも議論が活性化した点、オンデマンド講義資料が教員の負担軽減などに繋がる可能性がある点を挙げている。小曾川（2021）では 2020 年度に実施したオンデマンド形式の授業資料の作成方法や、テストの方法について述べている。授業資料はパワーポイントで作成した資料に音声を収録する方法を用いており、読み上げ原稿もパワーポイントの「ノート」欄に打ち込むことで、学生が文字でもインプットが出来るように工夫されていた。

2-2. 非同期型（オンデマンド型）のオンライン授業

オンライン授業のためのツールとして、Zoom などのオンライン会議ツールを用いた同期型（リアルタイム型）の授業が注目されたが、一方で非同期型（オンデマンド型）の授業実践も行われている。

田中（2021）ではオンライン講義について、同期型（Zoom 型）と非同期型（YouTube 型）の学生の認識の違いを明らかにするため、アンケート調査を実施している。その結果、学習者の姿勢や取り組みの違いによって、どちらをより支持するかが異なっていた。Zoom 型を支持するグループはグループワークに対する有効性を指摘しており、YouTube 型を支持するグループは繰り返しみることが出来る有効性を指摘していた。

オンデマンド型のオンライン授業が効果的に働いた実践例として、石崎・佐藤（2021）がある。2020 年度に行ったオンデマンド型オンライン授業による統計演習科目について、授業アンケートや e ラーニング確認テストを分析した結果、2019 年度の面接授業と比較して専門用語の理解度とデータ解析スキルの修得度は全ての項目で上昇していた。その要因として

受講生へのアンケート結果から「講義資料を自分の都合の良い時に閲覧でき、学習できた」「面接授業に比べて、周りが気にならず、自分のペースで学習を進めることができた」などを挙げている一方で、「課題が多いと感じる」「孤独感」などの阻害要因が挙げられている。

2-3. コロナ禍における日本語教員養成

文化庁国語科が2021年4月に示した「文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関・団体における新型コロナウイルス感染症への対応について」では、授業の遠隔化を含めた対応例についてまとめられている。文化庁届出受理日本語教師養成研修においては、文化審議会国語分科会が2019年に取りまとめた「日本語教育人材養成・研修の在り方について（報告）改定版」の中で示した、「日本語教師【養成】における教育内容」に対応することが求められており、「文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関・団体における新型コロナウイルス感染症への対応について」ではこれを根拠に、教育実習・教壇実習を必ず行わなければならないとしているが、やむを得ない理由等がある場合には、条件付きで遠隔による教壇実習等を認めることができるとしている。

このような状況にあり、大学等の日本語教師養成機関では、2020年度以降、オンラインでの教壇実習を含む、さまざまな実践が行われてきた。安原（2021）では、海外の提携校との交流を伴う演習形式の科目と、日本語教育実習や指導を含む科目を研究材料とし、学習者オートノミーの観点からポートフォリオの分析を行っている。交流や指導のあとに学習者の日本語を分析する授業内フィードバックを行うことで、自ら学ぶことができる学生が育成できるとしている。

松岡（2021）は、2020年度の「遠隔授業見学」の実践と、その際に学習者役を担った大学院留学生への半構造化インタビューを通して、留学生がどのような学びや気付きを得たかを分析している。2018～2019年度に教室での日本語授業を配信することで遠隔で日本語教育実習生が授業見学をする「遠隔授業見学」のシステム構築が行われてきたものの、2020年度に

新型コロナウイルス感染拡大防止のために教室授業が行えなくなったことに加え、これまで学習者役として参加していた交換留学生や短期留学生の協力が望めなくなったことから、日本語の授業自体をオンラインで配信し、見学者と兼ねる形で日本語教師志望の大学院留學生が学習者役を担うこととなった。見学者としてだけではなく学習者役でも参加することで、気づきや学びを学習者視点・教師視点の双方から得るのに有効であったと述べている。

宮谷ほか（2021）では、2020年度前期に行われた、遠隔オンライン授業見学システムを用いた、複数の大学の合同による日本語授業観察と協働学習についてまとめている。Zoomにより日本語授業を留學生に配信すると同時に、見学者も授業にアクセスして授業を見学するというものである。さらに授業見学の翌週に合同ディスカッションが行われ、これを通して日本語教育の異なる学習段階の學生がさまざまな視点を交差させ、理解を深めていることが観察されたと述べている。

上田・野畑（2021）では、遠隔で行われた日本語教育関連プログラムの一部の授業と、学習者や日本語教育の専門家との交流会活動の実践例についてまとめられている。オンライン授業は、授業の性格によってオンデマンド型とライブ型が使い分けられており、交流会は時期や相手先の所在地によって「三密」を避ける形での交流活動と遠隔での活動が行われていた。

佐々木（2021）では、2020年度に双方向型のオンライン授業として実施された日本語教育実習について実践報告を行っている。従来の対面実習では学習者を募る際、チラシを掲示するのみで行っていたことから、あまり多くの学習者が確保できない問題があったが、オンラインで実習を行うにあたり、来日できない短期交換留學生などにメールで案内を出したところ20名以上の申し込みがあったとのことである。指導教員である筆者はITの知識に不安を感じており、オンライン実習の指導を行う自信は全くなかったと述べているが、実際に指導を始めると、受講生のほうが指導教員よりも機器の扱いに長けており、大きなトラブルはなかったと述べている。

徐・川合（2021）では、新型コロナウイルス感染拡大により、台湾の大

学での日本語教育の対面実習がオンライン実習に切り替えられたことについて、実習受け入れ側の視点から実践報告を行っている。従来の対面での教育実習においては、実習生は日本にいううちに事前指導として入門中国語講座、過去の教壇実習のビデオ観察、日本語教科書の分析、教案作成について指導を受ける。台湾では2週間の滞在中に50分授業の教壇実習を2回行うが、実習中や実習前後に受け入れ先の大学の教員が指導を行う。また、教壇実習の前に授業見学を行う。さらに高校に訪問しての交流・授業参観や、ボランティア学生との交流がプログラムに含まれている。2021年度に行われたオンライン教育実習においては、授業見学は録画された授業の動画を共有する形で実施し、実習前の交流はLINEでグループを立ち上げて行い、教壇実習は実習生の所属する大学と実習先の大学の教室をそれぞれ遠隔で結んで実施した。

以上のように、2020年度から2021年度にかけて、それぞれの教育機関がそれぞれの環境や受講者の実態に合わせて、創意工夫をしながら授業運営を行ってきた過程が見て取れる。

3. 「日本語教授法Ⅰ」について

3-1. 科目の概要

「日本語教授法Ⅰ」は、2年生以上向けに開講されている人文学部の専門教育科目であり、「日本語教員養成課程」の必修科目にも位置付けられている。前期に開講され、2021年度は主に1部生(昼間生)向けの金曜2限と、主に2部生(夜間生)向けの月曜7限に開講されている。

現在の授業担当者(筆者)が本科目を担当し始めた2020年度からは、高見沢(監)(2016)『新・はじめての日本語教育Ⅰ [増補改訂版]』を教科書とし、日本語教育の基礎となる日本語の知識、心理学、社会言語学、第二言語習得理論、学習ストラテジーについて扱う講義科目として授業を運営している。2020年度は新型コロナウイルス感染症対策のために、全てオンラインで実施された。2021年度も社会的距離を十分に保った環境で講義

を行うことが難しいと考えられたため、全面的にオンラインで講義を実施するに至った。

3-2. 2021 年度のオンライン授業の形式

講義科目であり、履修者も 1 部開講クラスでは 100 人前後にのぼることから、リアルタイムでのオンライン授業の実施は難しいと考えた。受講者のインターネット環境を十分に把握してすべての受講者が問題なくリアルタイム講義を受講できる環境を整えることが難しいこと、前後に対面授業等が入る可能性があり、自宅等への移動の時間が確保できない懸念があったためである。

学修内容を整理・補足したスライド資料を再生しながら解説の音声を加える形式で動画を作成し、YouTube 上にアップロードした。YouTube 動画の再生が自宅のインターネット環境などの都合で難しい受講生がいる可能性を考え、動画と同じ内容の低ビットレートの mp3 音声²を作成し、スライド資料とともに Google ドライブを用いて提供した。

動画、スライド資料、音声ファイルは、ほぼ教科書の節に対応する部分で分割して作成した。動画や音声ファイルの長さは、おおむね数分～20 分程度の範囲内だった。動画はクラウド型のオンライン・ツールである「loom³」を用いて mp4 形式のファイルを作成し、YouTube 上にアップロー

² モノラル，11025 kHz。ビットレートは収録環境や機材の調子によって作成・編集ツールが異なったため一定ではないが、おおむね 16～24 kbps で作成している。

³ <http://www.loom.com>。画面キャプチャー，web カメラ，マイクからの音声などを動画として収録できる。インストール版と Google Chrome 拡張機能が提供されているが，本科目の講義動画を作成するにあたっては後者を使用した。スライド資料を作成した Google スライドとの相性が良かったためである。クラウド型であるため loom.com 上でも動画を共有できるが，受講生は操作感などが YouTube のほうが慣れていると考え，一度 mp4 ファイルとしてダウンロードしてから YouTube 上にアップロードした。

ドした。アップロードした際にはスライド資料に容易にアクセスできるように URL 短縮ツールで短縮したスライドの URL や、スライド内に登場する参考資料等の URL を YouTube の説明欄に提示し、視聴中や視聴後にアクセスしやすいように工夫した。動画は授業 1 回分を YouTube の再生リスト機能を用いてまとめ、再生リストの URL を大学が提供する LMS⁴上に提示し、分割された動画でも一気に見られるように工夫した⁵。スライド資料は Google スライドを用いて作成したが、印刷・保存などに適するように、1 回分のスライドをすべて 1 つにまとめたスライドも作成した。Google スライドが表示・閲覧しにくい環境にある受講生がいる可能性も考え、まとめたスライドについては pdf 化したものも提供した⁶。音声ファイルは、音声収録・編集ソフトの Audacity もしくは Cool Edit 2000 で、動画収録と同時に録音し、録音後に音量の調節や低ビットレート化などを行った。機材の不調や操作ミス等で録音がうまくいかなかった場合は、loom からダウンロードした mp4 動画をオンライン・ツールなどで mp3 化し、その後音量調節などをして保存した。スライド資料と音声ファイルは講義 1 回分を Google ドライブ上で 1 つのフォルダにまとめ⁷、その URL を大学提供の LMS に提示した。

予習は教科書の学修範囲を読み、わからない用語等をチェックしておくことを指示した。具体的な方法は指示していないため、予習の有無を確認することはできないが、授業は一度教科書を読んでいることを前提として進めた。

⁴ 2021 年度現在、富士通社の CoursePower が用いられている。

⁵ 個々の動画と再生リストは限定公開とし、URL を知っている受講生以外はアクセスできないようにした。

⁶ Google スライドの、ファイルを pdf 形式でダウンロードする機能を用いて作成した。

⁷ フォルダとその内部のファイル全てを限定公開にすることで、URL を知っている受講生以外はアクセスできないようにした。

復習は毎回「ミニ・レポート」と称して、授業で学んだ内容に関する問題に答えたり、関連する内容について意見を書いたりする課題を課した。これは Google フォームで実施した。「ミニ・レポート」は受講生自身が自らの理解度を確認すると同時に、授業担当者が受講生の理解度を知るためのものでもあった。オンデマンド形式の授業であったために直接学生からの質問を受ける機会がなかった。そこで、「ミニ・レポート」の設問のあとに必ず質問やコメントを自由に記入できる欄を設置した。

八城・西川 (2018) では、「授業内容の理解度」と「授業への積極的参加」が授業満足度に強く影響している」と述べているが、オンデマンド授業ではその場で受講生の反応を見て理解を確認しながら進めることができないうえ、受講者側も自らが授業に積極的に参加しているという感触が得にくいと思われる。そこで本科目では、前回の授業の「ミニ・レポート」のフィードバックや質問・コメントへの回答についても、動画、スライド資料、音声ファイルを作成した。正答率が低かったり質問があった学習項目については、詳細に解説しなおしたり、質問等に関連した内容についてほかの受講生の学びにも資すると考えた事項については、補足や情報提供を行った。

予習・復習を含めた授業の受講方法については、第1回の授業時にガイダンスとして説明を行った。また、いつからでも復習や期末試験対策ができるように、動画等の授業資料の公開は期限を定めず、受講者がいつでも視聴・閲覧やダウンロードができるようにした。

4. 受講方法に関する調査

第15回の「ミニ・レポート」として、本科目をどのように受講したかについての質問を行った。本科目では第14回目で学習ストラテジーについて扱っているが、自らの学びのストラテジーについて振り返ることを目的に実施した⁸。この「ミニ・レポート」を提出した受講生のうち、研究利用の許可があった回答145件を分析することとした。

4-1. 方法

第1～14回の「ミニ・レポート」と同様に、Google フォームを用いて課題の一環として行った。この調査は9ページで構成されており、1ページ目は回答確認のためのメールアドレス入力、2ページ目は「学術研究の利用に関して」、3ページ目は「個人に関わる設問」、4ページ目は「授業動画・音声に関する質問(Q1～2)」、5ページ目は「予習に関する質問(Q3～5)」、6ページ目は「授業の受講方法に関する質問(Q6～8)」、7ページ目は「復習に関する質問(Q9～15)」、8ページ目は「オンライン授業に関する質問(Q15～18)」、9ページ目はコメント等の自由記述である。2ページ目では学術研究の利用について回答者に許可を得る旨の記述と利用への同意の可否を問う質問を行い、3ページで学部や学年、受講動機など、回答者の基本的な情報について問った。4ページ目では望ましい授業動画の長さ(択一式)とその回答理由(記述式)、5ページ目では予習方法(複数選択)とその方法が自身に適していたかについて(5件法)とその回答理由について尋ねた。6ページ目では授業内容について5ページ目と同様の構成の設問を行い、7ページ目ではフィードバックのための資料と復習について、それぞれ4・5ページと同様の構成で質問をした。8ページ目ではオンライン授業と対面授業のどちらを好むかと、本科目が

⁸ 第14回で学修した内容は特に言語学習ストラテジーに関するものであり、厳密に言えば本調査の設問とは一致しない。また、言語学習ストラテジーの分類については主にオックスフォードによる分類を扱ったが、「記憶ストラテジー」「認知ストラテジー」「補償ストラテジー」「メタ認知ストラテジー」「情意ストラテジー」「社会ストラテジー」の6分類(オックスフォード1994)のうち、「メタ認知ストラテジー」にあたるものがほとんどであり、言語学習ストラテジーを網羅的に扱った設問にはなっていない。しかし、言語学習におけるストラテジーについての設問は第14回の「ミニ・レポート」ですでに取り組んでいること、日本語教育の現場においてオンライン授業の多様な実践が行われている現状から、オンライン授業での学習ストラテジーを意識することは日本語教育を学ぶうえでも有用であると考えた。

オンライン授業で良かったか対面のほうが良かったかについて、それぞれ5件法で尋ねた。詳しい設問形式や選択肢については、文末の資料を参照されたい。

4-2. 結果と考察

4-2-1. 回答者の情報

受講スタイル等の具体的な質問に入る前に、回答者の基本的な情報について問った⁹。回答者の学年と所属学部は以下の図4-1のとおりである。全体の3分の2程度が人文学部日本文化学科所属で、3分の1程度が人文学部英米文化学科所属であった。経営学部と法学部の学生も1名ずつ受講していたが、この2名は日本語教員養成課程の受講者である。学年は2年生が過半数を占めており、3年生が4割弱、4年生が1割程度であった。



図 4-1 回答者の基本情報

続いて、回答者の受講動機を下の図4-2に示す。日本語そのものや言語学習に関心のある回答者が多い。前述のとおり、本科目は日本語教員養成課程の必修科目であるが、日本語教員の資格や職業のために受講している回答者は15%程度で、それほど多くないことがわかった。「その他」の回答は2件で、「博物館過程の中で、受けてみると良い講義の一つに含まれていたから」「卒業要件の単位数を稼ぐため」という記述回答がされていた。

⁹ 調査の3ページ目に該当する。



図 4-2 回答者の受講動機

4-2-2. 適切な授業動画・音声の長さ

Q1では望ましい授業動画（もしくは音声）の長さを、Q2ではその回答理由を尋ねた。以下の図 4-3 に、回答者が望ましいと考える授業動画、音声の長さの回答の割合を示した。

前述のとおり、本科目では基本的に教科書の1節分に相当する内容に対して1本の動画（それと同じ内容のスライド資料と音声ファイル）を作成した。回答者が適切であると考える動画や音声の長さを問うた結果、「教科書のセクションごと」という回答がもっとも多く、過半数を占めていた。その理由としては、「教科書と見くらべて学習しやすいので」「復習がしやすいため」などの学修の際の利便性を挙げる回答が目立った。その他にも、「キリがいいから」のように内容の切れ目が適切であるという回答も見られた。

一律の時間で区切るという回答でもっとも多かったのが「一律 10～15 分程度」で 18%、次いで「一律 5～10 分程度」で 12%、「一律 15～20 分程度」で 10%であった。ほかに「一律 20～25 分程度」「一律 25～30 分程度」という選択肢もあったが、これらを選んだ回答者は 1 人もいなかった。これらの選択肢を選んだ回答者がそのように回答した理由としては、「集中力が保てるから（一律 5～10 分程度）」、「このくらいが集中力の持続がし

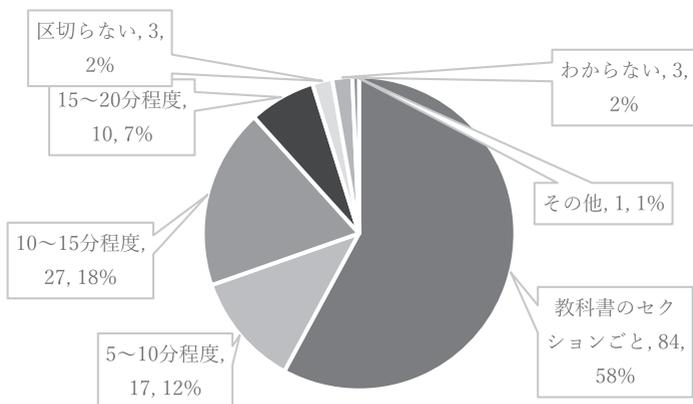


図 4-3 適切な授業動画（音声）の長さ

やすかったから（一律 10～15 分程度）」、「集中しやすい時間であるから（一律 15～20 分程度）」のように、集中力の持続を上げるものが多かった。

集中しやすい動画時間の長さには個人差があるものの 20 分を超えるものはなかったことから、受講者の取り組みやすさを考えると 1 本の動画は 20 分以下に留めるのが望ましいと思われる。本科目の授業動画（音声）はフィードバック用の動画などの一部を除いて数分～20 分程度であったことから、「教科書のセクションごと」という回答がもっとも多くなった可能性もある¹⁰。

「区切らない」との回答も 3 件あった。そのうち 2 件は、「すらーっと取り組めるから」のように、一続きであることに利便性を感じるという回答であった。それに対して残りの 1 件はその回答理由を「1 つの講義につき数本の動画よりも、1 本の動画の中でチャプター区切りになっている方が、後から見返す時などでも操作性が良いと感じます」としていた。ここでの「チャプター区切り」とは YouTube のチャプター機能であると思われる¹¹。

¹⁰ 「教科書のセクションごと」と答えた回答者のその回答理由のなかに「授業動画の長さでちょうどいいと感じた」のような回答が見られたことから、時間的にも本科目の動画の長さが比較的適切であったと思われる。

動画そのものを分けるのではなくチャプター機能を用いることで、動画を分けることに近い利便性が得られると思われる¹²。

4-2-3. 予習の方法

Q3では予習の方法を、Q4ではその方法が自分に合っていたかどうかを、Q5ではQ3・4の回答理由を尋ねた。予習の方法の回答割合¹³を図4-4に、その適性の自己判断を図4-5¹⁴に示す。予習として「教科書を読んで、どこがわからないか確認しておく」ことを指示していたが、予習として「教科書を読む」のみを行っていた回答者は半数近くにのぼった。「予習をしなかった」を除いて次にもっとも多かったのは「教科書を読んでわからなかったところについて、インターネットや教科書以外の書籍等で調べる」で、Q5の回答理由の中にインターネットで検索をしていたという回答が散見されたことから、学修内容がわからない際にインターネットが一定の回答者に利用されていることが見て取れる。教科書に何らかの書き込みや付箋などを行っている回答者の割合は多くないが、Q5の記述を見ると「見直すときに自分のわからないところがすぐわかるから（教科書を読んでわからなかったところに下線やマーカーを引くなどしてチェックする）」

¹¹ 視聴者が視聴したい部分を簡単に探し出し、その部分に頭出しをすることができる機能である。YouTubeのシステムによる自動生成も可能だが、投稿者自身が追加することもできる (<https://support.google.com/youtube/answer/9884579>, 最終閲覧日 2022年1月10日)。

¹² ただし、音声ファイルにそのような機能を付与することは難しい。

¹³ Q3は複数回答可の設問であったが、たとえば「教科書を読んでわからなかったページに付箋を貼る」などの選択肢を選んでいる回答者の中に「教科書を読む」を選択しているものと選択していないものがあった。そこで、「教科書を読む」の選択肢については、この選択肢のみを選んだ回答だけを集計している。なお、ほかの選択肢も選んでいるものを含めると71.7%となる。

¹⁴ 縦棒は平均値、エラーバーは標準偏差を示している。図4-7, 4-9, 4-11も同様である。

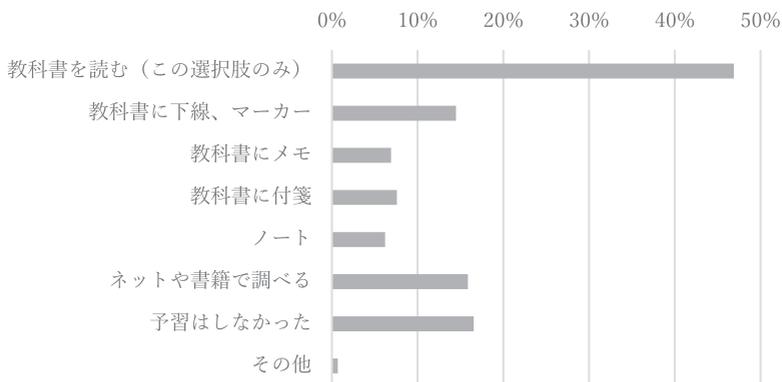


図 4-4 予習方法

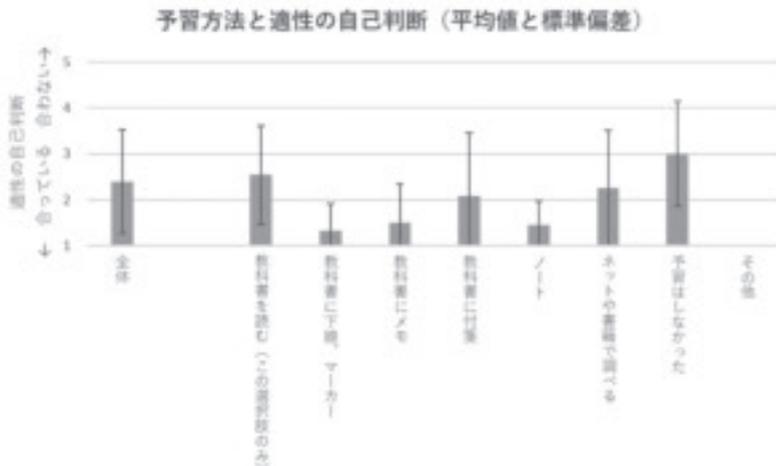


図 4-5 予習方法とその適性の自己診断

「動画を見たときに自分の不安要素が一目でわかることから（教科書を読んでわからなかったところについて、教科書自体にメモを書く）」「理解できたところとわからないところを区別できると思ったから（教科書を読んでわからなかったページに付箋を貼る）」のように、わからないところを明確にするために行っているという回答が目立った。「教科書を読んでわからなかったところをノートなど（教科書以外のものに）メモする」を選択

した理由としては、「他の勉強法も同じようにしているため」のように確立された学修スタイルによるものであることがわかる記述が多かった。

予習方法の適性については、過半数の回答者が「1」もしくは「2」と回答していた(平均値は2.39)。このことから、半分以上の回答者が自らの予習方法が自分に適していたと考えていることがわかる。ただし「教科書を読む」のみを行っていた回答者は「予習はしなかった」と回答した回答者を除けば、もっとも予習方法の適性が低いと考えているという結果が得られた(平均値2.54)。反対に平均値が特に高かった選択肢は「教科書を読んでわからなかったところに下線やマーカーを引くなどしてチェックする(平均値1.33)」、「教科書を読んでわからなかったところをノートなど(教科書以外のものに)メモする(平均値1.44)」、「教科書を読んでわからなかったところについて、教科書自体にメモを書く(平均値1.5)」、「その他(回答数1、適性の自己判断は「1」と回答)」であった。何らかの「書く」作業を伴う予習方法が特に適性が高いと判断される傾向にあった。これらの回答理由には「いままでの学生生活で、自分に合っていると思った方法がこれだったから(教科書を読んでわからなかったところに下線やマーカーを引くなどしてチェックする)」、「普段、勉強をする際にスタンダードな方法としてノートに纏める事を行っていたため(教科書を読んでわからなかったところをノートなど(教科書以外のものに)メモする)」のように、習慣として予習スタイルが確立していると思われる記述が多く見られた。

以上のことから、「教科書を読む」という教員側が最低限のものとして示している予習方法のみを採っている回答者はその予習方法が自分に合っていると感じにくい傾向にあるのに対し、何らかの別の方法(特に「書く」作業を伴うもの)を採っている受講者はその予習方法が自らの確立された学修スタイルによるもので、自分に合っていると感じやすいという傾向が見られた。

非同期型オンライン講義の取り組みと学生の受講スタイル（丸島）

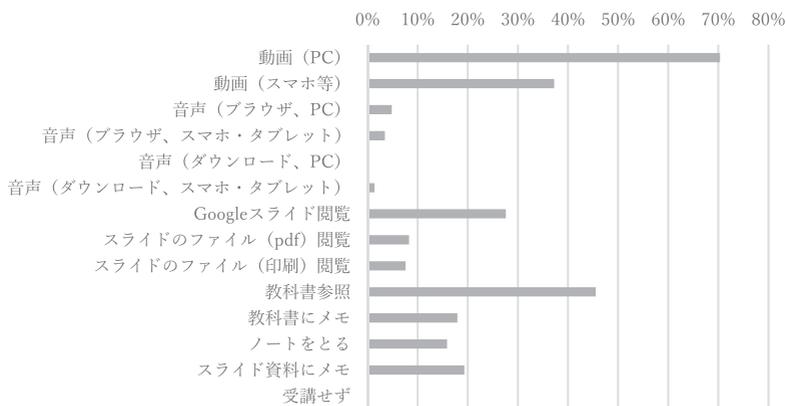


図 4-6 授業の受講方法

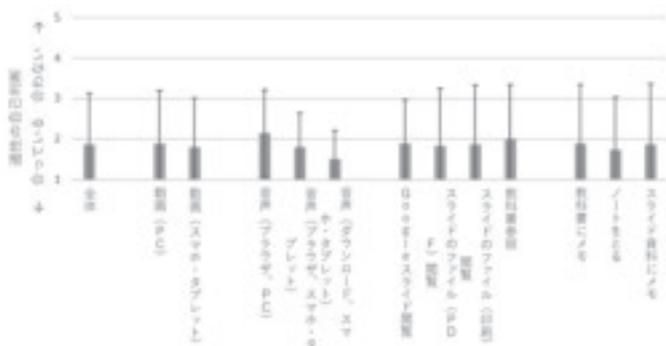


図 4-7 授業の受講方法とその適性の自己診断

4-2-4. 授業の受講方法

Q 6 では授業の受講方法を、Q 7 ではその方法が自分に合っていたかどうかを、Q 8 では Q 6・7 の回答理由を尋ねた。受講方法の回答割合を図 4-6 に、それぞれについて適性への自己判断を図 4-7 に示す。

YouTube にアップロードした授業動画を利用していたのは PC、スマホ等合わせて 145 名中 128 名¹⁵で、9 割近くが授業動画を用いていた。その

¹⁵ PC、スマホ等の両方で YouTube 動画を閲覧していた回答者も含む。

理由としては「YouTubeで動画を見ながら、教科書を見る、擬似講義のような形がやりやすかった」「動画の方が見やすいから」のような動画という形態そのものの取り組みやすさを挙げているものや、「YouTubeは再生リストがあって、見やすかったから」「YouTubeだと再生速度を早くしたり遅くしたりできる」のようにYouTubeの機能そのものの利便性を挙げているものもあった。また、「主に自宅で受講しており、WiFiのある環境であったため」「YouTubeで動画をみれる環境であったから」のように、自宅等の視聴環境を挙げているものもあった。

動画から音声を抽出してmp3ファイルにしたものを利用して¹⁶のは、145名中58名であった。そのうち、動画を用いなかった回答者は17名であった。動画を用いずに音声ファイルとスライド資料を組み合わせ受講した回答者はその理由として、「レジュメの好きな部分を見ながら音声をきけるから」「メモをすることが多く、ノートをとるよりもスライド資料にメモを取りながら受講した方が時間がかからないため」「自分のペースで勉強できるから」のように、動画資料より音声ファイルの使用が自らの学びのスタイルに合っていることが理由として挙げられているものが多かった。もともとは自宅等のインターネット環境が動画の視聴には充分でない受講者のために音声ファイルを用意したが、視聴環境を理由に音声ファイルを選択していると思われる回答は「動画を見るほどの環境がなく、音声で精一杯だったため」「自宅の回線環境とあっていたため」の2件のみであった。

¹⁶ ここには音声ファイルの聴取機器等についての選択肢（「mp3の音声をブラウザ上で聞いた（PC※MacやLinux系などを含む）」「mp3の音声をダウンロードして聞いた（スマートフォン・タブレット）」など）は選択していないものの、音声ファイルを聞いて受講する場合に閲覧するように指示したスライド資料の閲覧方法についての選択肢（「スライドのファイル（Googleスライドのもの）を閲覧しながら音声を聞いた」「スライドのファイル（印刷したもの）を閲覧しながら音声を聞いた」など）を選択した回答も含めている。

動画も音声ファイルも利用したと答えた回答者が挙げた理由としては、「使えるものを全て使おうと思ったから」「スマホやPCでの利便性を比べるためにどちらも使用した」のように、自らの学修スタイルを探ったことがうかがえる回答が見られた。

また、動画を見ながらスライド資料も併用していると答えた回答者は60名であった。動画にもスライド資料と同じものが表示されるため、動画視聴者にはスライド資料のニーズは高くないと想定していたが、「印刷したレジュメを手元に置いておくことで直接メモを書き込むことができ、復習する際に便利であるから（印刷）」「印刷する理由については、ブルーライトの浴び過ぎで画面を見続けられないから（印刷）」「紙を使わずデータを残すことで、印刷の手間と資料を探す手間が省けたから（pdfファイル）」のように、動画のみでは得られない利便性を得ていたと思われる。印刷したスライドに書き込んだり、スライドのファイルを保存したりするなど、それぞれの受講スタイルに合わせた工夫をしていることがうかがえた。

本科目でYouTube動画、mp3音声、スライド資料（Googleスライドおよびpdf化したファイル）を用意したのは、受講者の多様なインターネット環境に配慮してのことだったが、受講者はそれらを工夫して組み合わせ、多様な方法で授業を受講していたことがうかがえた。回答者の多くが本格的にオンライン授業を受講し始めたのは2020年度だと思われるが、1年以上を経てそれぞれのオンライン授業の受講スタイルが確立されてきていると考えられる。図4-7からも受講方法を問わず、その方法が自分に合っていると考える回答者が多いことが見て取れ、回答者たちのオンライン授業への慣れを示唆する結果が得られたと言える。

その一方で「対面授業にできるだけ寄った受講の仕方だと思ったから」「対面が理想だった」という、対面授業をのぞむ回答も見られた。

授業の受講方法の適性の自己診断については、全体の平均値が1.86であり、かなりの回答者が自らに合った方法が選択できていたと感じていると言えるだろう。受講方法とその選択理由からも回答者がそれぞれの環境や適性に合わせた方法を工夫していることが見て取れる。受講方法ごとに

個別で見ると、もっとも平均値が低かった(=自分に合っている)項目は「mp3の音声をダウンロードして聞いた(スマートフォン・タブレット)」(平均値1.5)だが、この項目を選択したのはわずか2名であった。次いで平均値が低かったのは「YouTubeで動画を見た(スマートフォン・タブレット)」で平均値が1.80、もっとも平均値が高かったのは「mp3の音声をブラウザ上で聞いた(PC※MacやLinux系などを含む)」で平均値は2.14であった。受講方法を問わず、その方法が「合っている」と考える回答者が多かったと言える。

4-2-5. フィードバックの受講方法

本科目では、講義終了後にGoogleフォームを用いたミニ・レポートを課しており、翌週にこの回答や質問等に対するフィードバックを行う授業資料を提供していた。講義資料と同様に、YouTube動画、mp3音声、スライド資料の大きく分けて3種類である。

Q9でフィードバックの受講方法、Q10でその方法がどの程度自分に合っていたか、Q11で回答理由を尋ねた。フィードバックの受講方法の割合を図4-8に、その適性の自己診断を図4-9に示す。

講義資料と同様、動画を活用しているとの回答がもっとも多かった。ただし講義資料ほどその割合は高くない。音声資料を聴取している回答者を含めても、145名中109名(75.2%)にとどまる。29名(20%)は動画や音声を利用せず、スライド資料のみを閲覧したり、ミニ・レポートの自らの回答を振り返ったりするのみであった。また、7名(4.8%)はフィードバック資料を利用していなかった。

フィードバックの受講方法への適性の自己判断については、フィードバックの資料を利用しなかった回答者を除いて、合っていると判断した回答者が多かった。適性の自己診断の平均値は2.01であり、受講方法と同様こちらもかなり低い値を示している。フィードバックを受講しなかった回答者を除けば、どの受講方法も値が低い(=合っている)ことから、受講方法を問わずそれぞれが自分に合う方法を工夫してフィードバックを受

非同期型オンライン講義の取り組みと学生の受講スタイル（丸島）

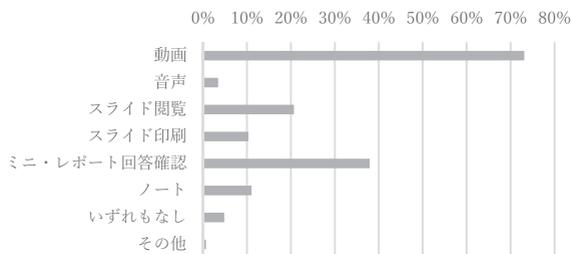


図 4-8 フィードバックの受講方法

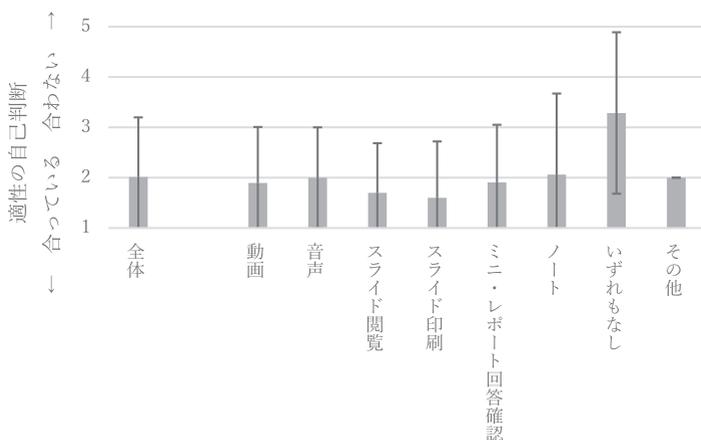


図 4-9 フィードバックの受講方法と適性の自己診断

講していたと言える。講義資料と同様、回答者たちはオンライン授業の受講スタイルがある程度確立されており、自分に合わせた方法を選択できたと自覚しているものと思われる。

4-2-6. 復習の方法

本科目の講義資料、フィードバック資料は、学期末まで受講者に対する公開を続けた。その理由の1つは、いつでも復習の機会を作ることができるようにするためであった。しかし、フィードバック資料の閲覧以外は指示していないため、受講者がどのように授業資料を復習に活用しているか

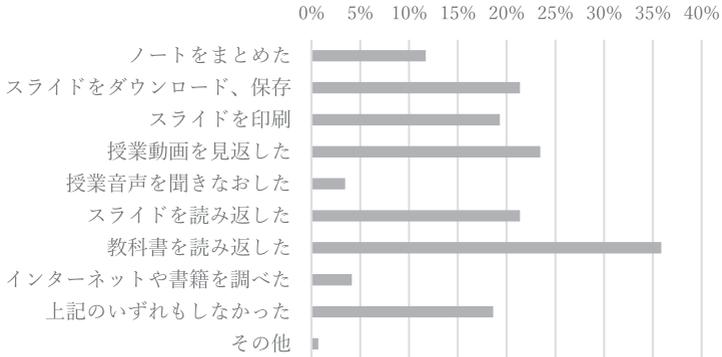


図 4-10 復習方法

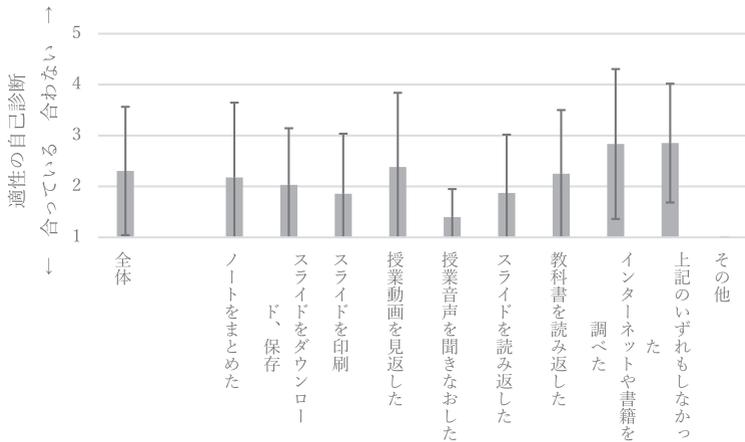


図 4-11 復習方法とその適性の自己診断

はわからない。そこで、Q12で復習の方法、Q13でその方法がどの程度自分に合っていたか、Q14で回答理由を尋ねた。復習の方法の割合を図4-10に、その適性の自己診断を図4-11に示す。

図4-10にもあるとおり、もっとも多い復習の方法は「教科書を読み返した」でその割合は35.9%であった。その理由としては「手軽かつ効率的だからです」「パソコンを立ち上げるより教科書を開くほうが気楽だから」のような復習の手軽さを挙げるもの、「大体が教科書に書いているため」「教

科書自体がわかりやすくまとまっているから」のように教科書の内容や構成が復習に適當であったことが挙げられていた。

次に多かったのは「授業動画を見返した」で、23.4%であった。その理由としては「聞き取れなかったところや、一回聞いても理解できないところを他の授業でも行なっていることだが、何回も巻き戻して再生した」「一回ではわからなかった箇所ももう一度みることでできたため、見返してまた学習し、理解を深めることが出来ました」のように、繰り返し視聴できることに利点を感じていると思われる回答が見られた。

その次に多かったのは「スライドをダウンロードして、保存した」と「スライドを読み返した」の2つでそれぞれ21.4%だった。前者の回答理由としては「ダウンロードすることで、自分なりにまとめることができる」「保存しておくといつでも見返すことが出来て良かった」のように学修項目の整理や見直しのために保存したという回答が見られた。後者については「スライドが一番分かりやすかった」「スライドが1番まとめられていた」という回答理由が見られた。

次いで多かったのは「スライドを印刷して、整理した」で19.3%であった。その理由としては「印刷したものに授業の内容を書き込んでいたから」「印刷したレジユメにメモしてあったので、それを見れば十分復習になると思ったから」のように予習時や授業の受講時の学びと関連させて復習も行っていることがうかがえるもの、「すぐに資料を見ることができたため」「パソコンで文字を追うのがつらいから」のように紙媒体に利点を感じていると思われる回答が見られた。

その次に多かったのは「上記のいずれもしなかった」で18.6%だった。理由が書かれていないものも多かったが、「フィードバック動画を一番活用していたため」「復習としては主にフィードバック動画の視聴で済ませていたから」のようにフィードバック動画で充分であると考えただとと思われる回答や、「時間がなかった」「他の授業との兼ね合いから、復習は難しかった」のように時間的な制約を理由にしているものも多かった。

復習方法に対する適性の自己判断としては、全体の平均値は2.30であ

り、それほど高い(=合わない)とは言えないものの、授業(平均値1.86)やフィードバックの受講方法(平均値2.01)に比べると高い(=合わない)。回答者が少ない「授業音声を聞きなおした」を除くともっとも低い(=合っている)のは「スライドを印刷して、整理した」の平均1.86、次いで「スライドを読み返した」の平均1.87、「スライドをダウンロードして、保存した」の平均2.03である。その一方で「インターネットや教科書以外の書籍を調べた」の平均2.83や「授業動画を見返した」の平均2.38が比較的高い(=合わない)。「インターネットや教科書以外の書籍を調べた」の回答者はそもそも少なかったが、合わないと判断した理由として「ネット上に錯綜する情報の中で、正しいものを見極める力が無く、再度授業動画を復習すると、間違っただけを受容していたことが多々あったから」というものが挙げられていたことが興味深い。オンライン授業はPCやスマートフォンなどを用いて受けることが多いため、インターネット検索との親和性が高いと思われるが、インターネット上には不正確な情報や誤解を招くものも少なくない。オンライン授業では、インターネットで正確な情報をどのように見極めるかについての指導が、対面授業以上に必要だろう。

以上のことから、復習にスライド資料を活用することが、効果的な復習につながる可能性がある。スライド資料は動画等に比べると一覧性が高く、全体を俯瞰したり理解していない部分を洗い出したりするのに効果があると思われる。

4-2-7. オンライン授業への志向性

Q15でオンライン授業をどの程度好むか、Q16でその理由を尋ねた。また、Q17で本科目がオンライン授業で良かったかどうか、Q18でその回答理由を聞いた。Q15・17の回答をまとめたものが下の図4-12である。

Q15の一般論としてオンライン授業を好むかどうかについては、平均が2.67¹⁷で、中間よりややオンライン授業を好む傾向があるが、全体的に分散

¹⁷ 数値が少ないほどオンライン授業を好むと考えているということである。

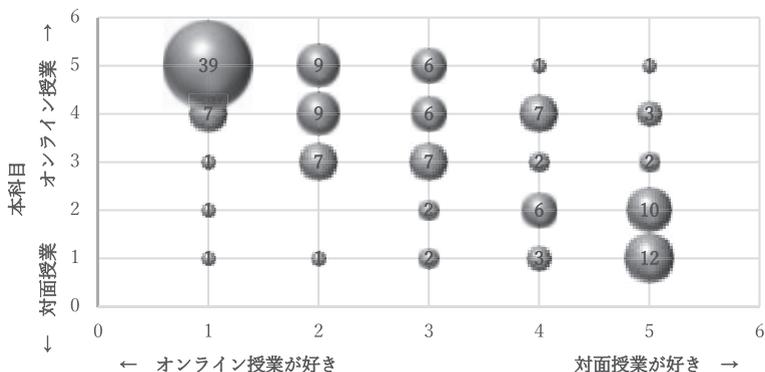


図 4-12 オンライン授業／対面授業の志向性

していると言える。Q17の本科目がオンライン授業で良かったかという問いについては、平均が3.6¹⁸で、こちらもややオンラインを好む傾向にある。

一般論としてオンライン授業を好む（1，2）と回答した理由については、「オンラインだと、配布された資料等を好きな時に見返すことができ、講義自体の質もそれまで対面と変わらない（1）」「何回も見直せるし、自分の都合に合わせて使用できるから（2）」のようなオンデマンド型の授業の利点である「見返すことができる」点を挙げているもの、「通学時間がかからないため（1）」「交通費や自分の事情に関わらず、授業を受けることができたため（1）」「登校しなくてもよいから（2）」のように大学に行かなくても良いことに時間や費用面の利点を感じる回答が目立った。

一方で対面授業を好む（4，5）と回答した理由としては、「対面授業のほうが頭に入りやすいから（4）」「対面授業の方が集中しやすく、毎回の課題提出に追われて講義内容の理解が疎かになることが少ないと感じたから（4）」のように対面授業の学びやすさを挙げるもの、「オンラインだと

¹⁸ 数値が少ないほど対面授業のほうが良かったと考えているということを意味する。Q15とQ17は指標が逆転しているが、これは両者の設問が似ているために回答者に設問をよく読んで理解してほしいと考えたためである。

集中力にかけてしまう(5)」「対面の方がやる気が出るからです(5)」のように対面授業のほうがモチベーションを保つことができるとする回答が目立った。

本科目がオンライン授業で良かった(4, 5)と回答した理由としては、Q15~16で挙げられていたものと類似の回答(オンデマンド型授業の利点、登校しないことの利点)とは別に、「オンラインでも、十分学べた(4)」「対面でなければならないメリットが少ないと感じたから(5)」のように、対面であるメリットが特に見いだせないとしたものや、「YouTubeの動画が一つずつ短く分けられており、さらに再生リストでまとめてあって学習しやすく、集中して学習に取り組むことができたから(4)」「この講義は、早めに講義動画が上がったりフィードバックがあったりとオンラインの中でも理想に近い形であったと感じるから(4)」のように、授業運営方法をその理由とするものが見られた。

本科目は対面授業が望ましかった(1, 2)と回答した理由としては、Q15~16で挙げられていたものと類似の回答(学びやすさ、モチベーション)のほかに、「質問したり、友達と考えあったりしたかった(1)」「対面だと他の受講生と意見交換もできたと思ったから(1)」などの受講者同士のコミュニケーションやグループワークなどを期待していると思われるものが目立った。

Q15とQ17の回答の相関係数を求めた¹⁹ところ、中程度の相関があると言える($r = -0.695762$)²⁰。無相関の検定(両側検定)を行った²¹ところ、一般論としてオンライン授業を好む回答者ほど、本科目でもオンライン授

¹⁹ Microsoft Excelの分析ツールを用いて、相関係数を算出した。

²⁰ Q15は数値が少ないほどオンライン授業を、Q17は数値が少ないほど対面授業を望むという設計をしたため、数値としては逆相関であるが、「一般論としてオンライン授業を好む回答者は、本科目でもオンライン授業が好ましいと答えた」傾向があると言える。

²¹ 相関係数をもとに、手計算でt値、自由度、p値を算出した。

業が望ましいと答えたと言える ($p < .001$)。

図 4-12 から検定の結果からと同様の傾向が見て取れるが、なかには一般論としてはオンライン授業が好ましいと考えるものの本科目では対面授業が望ましいと考えた回答者や、その逆の回答をした回答者も少ないものの見受けられる。一般論としては対面授業が好ましい (Q15, 4, 5) と答えたものの本科目はオンライン授業で良かった (Q17, 4, 5) と考える回答としては「オンライン授業だと授業を忘れて、さぼってしまいます (Q16) / 対面授業だと YouTube を巻き戻って聞いたり、復習に使えないと考えました (Q18)」のようにオンデマンド授業に利点を感じたと思われるものや、「分からなかった部分があれば友達や先生にすぐ確認できるから。授業動画を見ることは時間が長くなってしまうと苦痛を感じることもあるから (Q16) / この授業はフィードバックのシステムがあったため早めに解説してくれたため。さらに授業動画時間も適切であると感じたから (Q18)」のように、フィードバックに力を入れたり授業動画の長さに工夫をしたりしたことが、オンライン授業のデメリットになりやすい部分をカバーしたと見受けられる回答が見られた。その反対に一般論としてはオンライン授業が望ましいと答えた (Q15, 1, 2) もの、本科目は対面のほうが望ましいと答えた (Q17, 1, 2) ものとしては、「楽だから (Q16) / より詳しく学びたかった (Q18)」「自分のペースで取り組めるから (Q16) / だらけて知識が身につかないこともあったから (Q18)」のように期待通りのオンライン授業の利点が得られなかったものと思われる回答があった。

5. 結論と展望

本論ではここまで、2021 年度前期にオンデマンド授業の形式で開講された「日本語教授法 I」の授業形式と、受講者が本科目をどのように受講し、その方法についてどのように自己評価しているのかについて、調査を通して考察を行った。

本科目はおもに動画で授業を提示した。教科書の節の区切りにしたがっ

て授業動画を分割したが、オンデマンド型で授業動画や音声を提示する場合、内容の区切りも考慮しながら、1本20分程度におさめるのが望ましいと言える。それ以上になると、受講者の集中力が持続しないと考えられるためである。

本科目は全受講者が2年生以上であることもあり、オンライン授業の受講はある程度慣れており、それぞれの受講スタイルがある程度確立されていることが見て取れた。受講スタイルにはバリエーションがあったが、多くの受講生がその方法が自分に合っていると考えていることがわかった。スライド資料や音声ファイルはおもに自宅等に十分なインターネット環境が敷かれていない受講生に向けたものであったが、インターネット環境が充分でないと思われる回答者はごくわずかで、むしろ受講生それぞれが工夫してこれらの資料を自分のスタイルに合わせて活用していることがうかがえた。

オンライン授業の受講スタイルは確立されている一方で、予習や復習の方法についてはあまり自らに適切な方法が確立されていないことも見て取れた。特に予習では教員に指示された「教科書を読む」のみを行っていた回答者はあまりその方法が自らに合っていないと感じていたようである。一方で教科書を読むだけでなく、教科書にメモやラインを付し、ノートにまとめていた回答者はその方法が自らに合っていると感じる傾向が強かった。復習に関してはスライド資料の活用が、効果的な復習に繋がりがやすかったものと思われる。予習や復習の方法についてはオンライン授業に限ったものではなく、どのような授業形態であっても受講生が向き合わなくてはならない可能性が高いものである。初回の授業時に、自らに合った予復習の方法を意識させる機会を設ける必要があるかもしれない。

今回の回答者については、オンライン授業と対面授業ではややオンライン授業を好む回答が多かったものの、全体としては回答の傾向は分散しており、オンライン授業への志向性はまちまちであったと言える。一般論としてオンライン授業を好む回答者ほど、本科目もオンラインで開講されてよかったと回答する傾向があった。

以上のことから、本科目で効果的に作用した工夫と、改善点についてまとめたい。本科目で効果的に作用した点としては、(1) 早めに授業資料を提示し、いつでも受講や復習ができるように公開期限を設けなかった点、(2) 授業動画や音声を授業内容で区切り、おおむね1本につき20分程度までにした点、(3) フィードバックに力を入れた点、(4) 授業動画だけでなく音声やスライドも提供した点の4つを挙げたい。改善点としては、(1) 受講者同士の交流の機会を持つ工夫、(2) 予習や復習の方法について自覚的になるような工夫をすべきであったことが挙げられる。

今回得られた知見を、今後の授業運営に活用していきたい。

謝辞

SNSなどを通じてオンライン上で緩やかに関わってくださっている日本語教師の先生方には、オンデマンド型授業を運営するにあたってさまざまな知見やアイデアを与えて頂きました。心より感謝申し上げます。また、調査に協力してくださった受講生の皆様にも御礼を申し上げます。

参考文献

- オックスフォード、レベッカ(1994)『言語学習ストラテジー：外国語教師が知っておかなければならないこと』宍戸通庸・伴紀子(訳)、凡人社。
- 高見沢孟(監)(2016)『新・はじめての日本語教育I [増補改訂版]』、アスク出版。
- 石崎龍二・佐藤繁美(2021)「オンデマンド型オンライン授業による統計演習の教育効果(2020)」『福岡県立大学人間社会学部紀要』2, 163-178。
- 上田和子・野畑理加(2021)「2020年度日本語教育関連活動の報告：オンライン時代における交流活動の実践と検証」90, 66(37)-53(50)。
- 柿崎真砂子(2020)「名古屋市立大学医学部におけるオンライン講義」『医学教育』51(3), 270-271。
- 小曾川真貴(2021)「初のオンライン講義を実施して」『中京大学図書館学紀要』41, 1-8。
- 佐々木香代子(2021)「オンラインによる日本語教育実習」『琉球大学国際教育センター紀要』5, 29-37。

- 徐孟鈴・川合理恵(2021)「対面からオンラインへと切り替えた日本語教育実習：日本人実習生を受け入れている台湾 M 大学の実践」『台湾日本語文學報』50, 223-254.
- 田中一裕(2021)「オンライン講義に対する学習者の認識調査：Zoom 型と YouTube 型の比較分析」『創生ジャーナル』4, 35-43.
- 藤居岳人(2021)「二〇二〇年度オンライン講義の取り組み報告」『中国研究集刊』67, 100-103.
- 文化審議会国語分科会(2019)「日本語教育人材養成・研修の在り方について(報告)改定版」
- 文化庁国語科(2021)「文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関・団体における新型コロナウイルス感染症への対応について」
- 松岡里奈(2021)「日本語教育実習生見学用授業に学習者役で参加した大学院留学生の気づきと学びに関する一考察」『日本語・日本文化』48, 73-96.
- 宮谷敦美・今西利之・松岡里奈(2021)「遠隔による日本語授業観察と協働学習を通じた日本語教師養成の試み」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』19, 41-62.
- 八城薫・西川千登世(2018)「学生による授業評価に関する研究(1):授業満足度に影響する要因の検討」『大妻女子大学人間関係学部紀要』20, 9-18.
- 原順子(2021)「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム：2020年度の報告と学習者オートノミーを育てる授業内フィードバック」『神女大國文』32, 66-56.

資料1 第15回ミニ・レポート(1ページ)

第15回 ミニ・レポート (1部)

メールアドレスは匿名で送信しますので、大学のアドレス以外でもかまいません。(国書のコピーが自分のメールアドレスに届きます。)
メールアドレスを入力したら、「次へ」をクリックしてください。

Google にログインすると作業内容を保存できます。詳細

*必須

メールアドレス*

メールアドレス

次へ

1/1ページ

フォームをクリア

資料2 第15回ミニ・レポート（2ページ）

学術研究への利用に関して

- 収集するデータについて
 - この調査は丸島步（北海道大学人文学部）の学術研究に使用させていただく場合があります。
 - 授業の受け手の方に関する質問に回答していただきます。その結果を解析し、回答にどのような傾向が見られたかを分析・考察します。その他、学部や学年等の情報を提供していただき、必要に応じてそれらの情報とアンケート結果との関連性を分析します。
 - データは学内外の学会・研究会、論文等で研究結果の一部として公開することがあります。
 - 協力者の実務時の学年などは公開される場合があります。氏名は公開しません。回答者ごとの傾向とデータ、その統計結果も公開することがありますが、この際も氏名は公開しません。
- 個人情報について
 - 収集したデータと個人情報については、氏名等を符号化した上で扱います。氏名とデータの符号との対応表ならびに収集した資料は厳重に管理します。研究の成果を公表する場合でも、個人が特定できないように十分配慮します。
- 安全管理
 - 本実験は人体に負担を与えないものではありませんが、万が一身体的精神的負担や苦痛を感じた場合は、調査をすみやかに中止してください。
- インフォームドコンセント
 - 調査への参加は任意です。参加に同意した後も、いつでも同意を撤回することができます。撤回により不利益な対応を受けることはありません。回答者本人から請求があれば、研究結果や回答者本人についての当該データを開示します。
- 実験についてのお問い合わせ
 - step@ipc.hokudai.ac.jp（質問者：丸島）

※お願い

- 回答中、回答後を問わず、調査内容を第三者に伝えないようお願いいたします。

上記の内容に同意していただける場合には「同意する」を選択して次に進んでください。同意できない場合には「同意しない」を選択してください。今回のミニ・レポートの設問は、学修の振り返りと教員の授業改善のためのためでもあるので全員に回答してほしいですが、「同意しない」を選択した方のデータは学術研究には利用しません。また、回答の内容は成績に影響しません。*

同意する

同意しない

戻る 次へ 2/9 ページ フォームをクリア

資料3 第15回ミニ・レポート(3ページ)

個人に関わる設問

学生番号*

回答を入力

氏名*

回答を入力

所属学部*

人文学部日本文化学科

人文学部英米文化学科

経済学部

経営学部

法学部

工学部

その他 _____

学年*

- 2年生
- 3年生
- 4年生
- 科目等履修生
- その他: _____

この授業を受講した理由（いくつでも）

- 初来、日本語教師を進路の選択肢の一つとして考えているから
- 日本語教員養成課程を受講しているから
- 日本語に興味があるから
- 言語学習に興味があるから
- 教育（国語教育・英語教育など）に興味があるから
- 異文化交流や多文化共生に興味があるから
- 時間帯の都合が良かったから
- なんとなく
- その他: _____

戻る

次へ

3/9 ページ

フォームをクリア

資料4 第15回ミニ・レポート(4ページ)

授業動画・音声に関する質問

Q1. 授業の動画・音声は、教科書のセクションごとに提示しましたが、適切な区切り方はどれくらいだと思いますか。*

教科書のセクションごと

一律5～10分程度

一律10～15分程度

一律15～20分程度

一律20～25分程度

一律25～30分程度

区切らない

わからない

その他 _____

Q2. Q1のように答えたのはなぜですか。*

回答を入力 _____

戻る 次へ 4/9ページ フォームをクリア

資料5 第15回ミニ・レポート（5ページ）

予習に関する質問

Q3. 予習はどのように行いましたか。主なものを全て答えてください。*

- 教科書を読む
- 教科書を読んでわからなかったところに下線やマーカーを引くなどしてチェックする
- 教科書を読んでわからなかったところについて、教科書自体にメモを書く
- 教科書を読んでわからなかったページに付箋を貼る
- 教科書を読んでわからなかったところをノートなど（教科書以外のものに）メモする
- 教科書を読んでわからなかったところについて、インターネットや教科書以外の書籍等で調べる
- 予習はしなかった
- その他: _____

Q4. Q3の方法は自分に合っていたと思いますか。*

	1	2	3	4	5	
合っていた	<input type="radio"/>	合っていない				

Q5. Q3のような予習の方法をとったのはなぜですか。また、Q4でそのように答えた理由も書いてください。*

回答を入力 _____

戻る 次へ 5/9ページ フォームをクリア

資料6 第15回ミニ・レポート(6ページ)

授業の受講方法に関する質問

Q6. 授業はどのように受講しましたか。主なものを全て答えてください。

- YouTubeで動画を見た(PC ※MacやLinux系などを含む)
- YouTubeで動画を見た(スマートフォン・タブレット)
- mp3の音声をブラウザ上で聞いた(PC ※MacやLinux系などを含む)
- mp3の音声をブラウザ上で聞いた(スマートフォン・タブレット)
- mp3の音声をダウンロードして聞いた(PC ※MacやLinux系などを含む)
- mp3の音声をダウンロードして聞いた(スマートフォン・タブレット)
- スライドのファイル(Googleスライドのもの)を閲覧しながら音声を聞いた
- スライドのファイル(pdf化したもの)を閲覧しながら音声を聞いた
- スライドのファイル(印刷したもの)を閲覧しながら音声を聞いた
- 教科書を参照しながら授業を視聴した
- 教科書にメモを書きながら(付箋等含む)授業を視聴した
- ノートを取りながら授業を視聴した(ルーズリーフ罫やデジタルのものも含む)
- 印刷したスライド資料にメモを取りながら授業を視聴した
- 授業は受講しなかった
- その他: _____

Q7. Q6の方法は自分に合っていたと思いますか。*

	1	2	3	4	5	
合っていた	<input type="radio"/>	合っていなかった				

Q6、Q6のような受講方法をとったのはなぜですか。また、Q7でそのように答えた理由も書いてください。*

回答を入力

戻る 次へ  6/9 ページ [フォームをクリア](#)

資料7 第15回ミニ・レポート(7ページ)

復習に関する質問

Q9. フィードバックをどのように復習に活用しましたか。主なものを全て答えてください。*

- フィードバック動画を視聴した
- フィードバックの音声聞いた
- フィードバックのスライド資料(Googleスライド、pdf)を閲覧した
- フィードバックのスライド資料を印刷してまとめた
- ミニ・レポートの自身の回答を読み直した
- ノートをとった(ルーズリーフ類やデジタルのものも含む)
- 上記のいずれもしなかった
- その他 _____

Q10. Q9の方法は自分に合っていたと思いますか。*

1 2 3 4 5

合っていた ○ ○ ○ ○ ○ 合っていなかった

Q11. Q9のような方法をとったのはなぜですか。また、Q10でそのように答えた理由も書いてください。*

回答を入力 _____

Q12. フィードバックの資料を活用するほかに、復習のためにしたことはありますか。主なものを全て答えてください。*

- 授業を受講したあとにノートをまとめた（ルーズリーフ類やデジタルのものも含む）
- スライドをダウンロードして、保存した
- スライドを印刷して、整理した
- 授業動画を見返した
- 授業音声を開きなおした
- スライドを読み直した
- 教科書を読み直した
- インターネットや教科書以外の書籍を調べた
- 上記のいずれもしなかった
- その他 _____

Q13. Q12の方法は自分に合っていたと思いますか。*

1 2 3 4 5
合っていた ○ ○ ○ ○ ○ 合っていなかった

Q14. Q12のような復習の方法をとったのはなぜですか。また、Q13でそのように答えた理由も書いてください。*

回答を入力 _____

戻る

次へ

7/9 ページ

フォームをクリア

資料8 第15回ミニ・レポート(8ページ)

オンライン授業に関する質問

Q15. オンライン授業(オンデマンド)を対面授業と比較したときに、どちらが好きですか。(この授業に限らず、一般論として教えてください)*

1 2 3 4 5

オンライン授業のほうが好き 対面授業のほうが好き

Q16. Q15のように答えたのはなぜですか。*

回答を入力

Q17. この授業について、あなたの考えに近いものはどれですか。*

1 2 3 4 5

対面で受けたかった オンライン授業で良かった

Q18. Q17のように答えたのはなぜですか。*

回答を入力

戻る 次へ  8/9ページ フォームをクリア

資料9 第15回ミニ・レポート（9ページ）

お疲れ様でした！

ここまで回答してくださり、ありがとうございました。最後にコメント等があったら記入してください。

回答を入力

回答のコピーが指定したアドレスにメールで送信されます。

戻る 送信 9/9 ページ フォームをクリア

The image shows a confirmation screen for a form submission. At the top, a dark grey bar contains the text 'お疲れ様でした！' (Thank you for your hard work!). Below this, a white box contains the message 'ここまで回答してくださり、ありがとうございました。最後にコメント等があったら記入してください。' (Thank you for your response up to this point. If you have any comments, please enter them at the end). Underneath is a text input field with the placeholder '回答を入力' (Enter your answer). Below the input field, a note states '回答のコピーが指定したアドレスにメールで送信されます。' (A copy of your answer will be sent via email to the designated address). At the bottom, there are four buttons: '戻る' (Back), '送信' (Submit), '9/9 ページ' (9/9 pages), and 'フォームをクリア' (Clear form).